尾島町囲遺跡

福岡県筑後市大字尾島所在遺跡の調査
筑後市文化財調査報告書
第40集

2002

筑後市教育委員会

序

本報告書は、平成13年度に発掘調査を実施しました尾島町囲遺跡の調査成果をまとめたものであります。

筑後市の南部、尾島町囲遺跡が所在する大字尾島には、かつて旧藩政時代に繁栄した在郷町が、現在の国道209号線（旧街道）沿いにありました。当地は、西流する矢部川の氾濫源にあたる地域であったことから、その洪水対策として町全体を囲む溝と堤防が備えられるといった画期的なものでした。今回は、その一部を調査する機会を得たことにより、当時の様相を僅かながら垣間見ることができました。

本報告書が、地域における文化財及び歴史に対する認識と理解を深めるとともに学術研究の一助になれば幸いと存じます。

なお、発掘調査から整理報告に至るまで、多大なご協力を頂きました関係者並びに作業参加者の方々に深く感謝します。

平成14年3月

筑後市教育委員会
教育長　牟田口和良

例　言

1.本書は、宅地分譲に係る道路設置工事に伴い、コガホームの委託を受けて筑後市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2.発掘調査、出土遺物の整理、文化財調査報告書の作成は筑後市教育委員会が行い、出土遺物・図面・写真などは筑後市教育委員会において所蔵・保管をしている。

3.調査に用いた測量座標は、国土調査法第Ⅱ座標系を基準としており、本書に示される方位は全てG.N.（座標北）を示す。更に、本文中に記される遺構の角度はこれを基準としたものである。また、水準はT.P.を基準としている。

4.本書に使用した遺構・遺物等の図面類及び写真類は小林勇作が担当し、浄書は仲文恵が行った。

5.本書に使用した遺構表示は下記の略号による。

SD―溝　　SX―不明遺構

6.本書の執筆及び編集は小林が担当した。

目　次

Ⅰ.調査経過と組織 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
Ⅱ.位置と環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
Ⅲ.調査成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
（1）はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
（2）検出遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
（3）出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
Ⅳ.まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

Ⅰ.調査経過と組織

コガホームは、筑後市大字尾島字町囲653-1外に宅地分譲の工事を計画し、予定地における埋蔵文化財の有無とその取扱いについて、筑後市教育委員会に照会を行った。筑後市教育委員会ではこれを受け、現地での確認調査を実施したところ、予定地内からは埋蔵文化財が確認された。これにより、筑後市教育委員会は関係者と今後の埋蔵文化財の取扱いについて協議した結果、永久構築物である道路部分についてのみ発掘調査を実施することとし、発掘調査から報告書作成に要する費用はコガホームが負担することで合意した。

発掘調査の面積は約70㎡、期間は平成13年6月18日～同年7月9日で、発掘調査において出土した遺物の整理と報告書作成については、随時、筑後市役所内文化財整理室で行った。

調査組織

1）調査体制

総括	教育長	牟田口和良
	教育部長	下川　雅晴
庶務	社会教育課長	松永盛四郎
	文化係長	成清　平和
	文化係	永見　秀徳
		小林　勇作（調査担当）
		上村　英士
		柴田　　剛（嘱託）
		立石　真二（嘱託）

2）発掘調査参加者（順不同、敬称略）

発掘作業員	牛島蓉子、瀬戸八重子、馬場千鶴子、平井正芳、平尾仁子、村上幸子、本村修一、森山美津子、吉開朝子

3） 整理作業参加者（順不同、敬称略）

整理補助員	平塚あけみ、仲文恵
整理作業員	妹川玲子、佐々木寿代、福田澄子、野間口靖子、野口晴香、湯川琴美、横井理絵

なお、発掘調査及び報告書作成に際しては、以下の方々にご指導、ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。

小川泰樹（福岡県教育庁）、大石昇（久留米市教育委員会）、坂井義哉（大牟田市教育委員会）

II.位置と環境

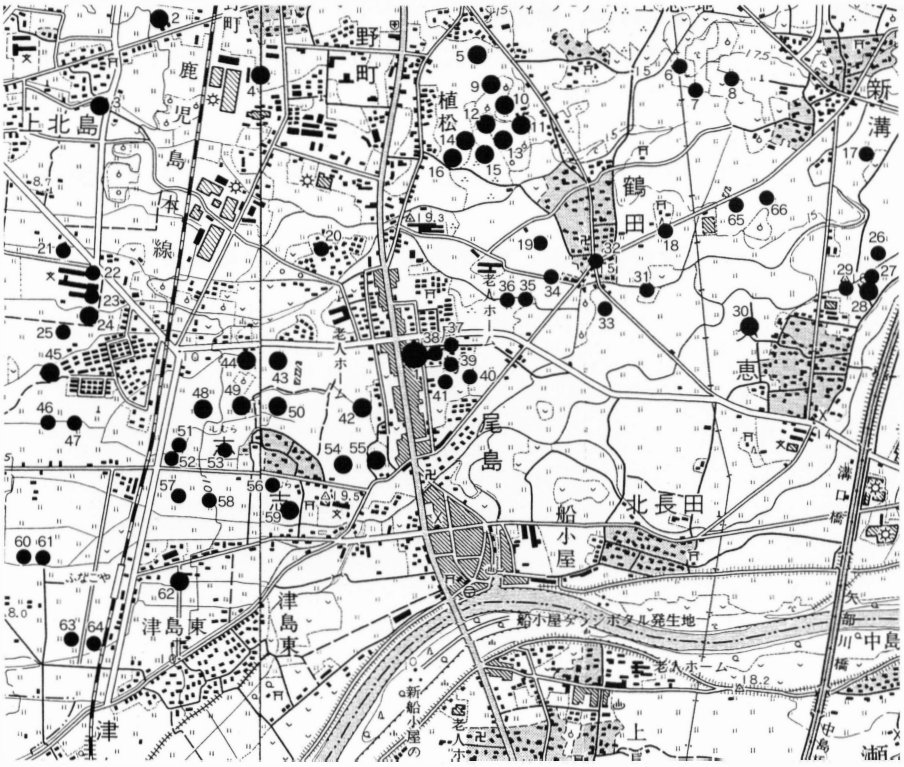
筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部にあたる。市域をJR鹿児島本線と国道209号線が縦断し、国道442号線が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、潅漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は、国道に沿って市の中心部に形成されている。

今回報告する尾島町囲遺跡は、筑後市の南端部に近い、標高12.5m位の低地に存在する。当遺跡の周辺には、過去の発掘調査によって多くの遺跡が点在していることが明らかになっている。当遺跡より西方に位置する代表的な遺跡は、縄文～弥生時代にかけての遺物や竪穴式住居が確認された「裏山遺跡」[註1]、弥生時代終末～古墳時代前期を主体とする竪穴式住居が確認された「狐塚遺跡」[註2]、弥生～古墳時代の集落跡である「上北島平塚遺跡」等がある。一方東方では、縄文時代の落とし穴や弥生時代終末期の竪穴式住居が確認された「鶴田岸添遺跡」[註3]、古代官道や中世集落跡が確認された「鶴田中市ノ塚遺跡」等があり、北方では旧石器～弥生時代の複合遺跡である「鶴田牛ヶ池遺跡」[註4]等があげられる。

さて、当遺跡が所在する尾島地区は、藩政期に形成された久留米藩の在郷町[註5]であったことが知られている。筑後市内では、この他に4ヶ所（盛徳町・宿町・水田町・西牟田町）で形成されており、うち3ヶ所（盛徳町・宿町・尾島町）は旧街道（坊津街道）筋に存在していた。市内を縦断する国道209号線は、旧街道にほぼ沿うように設置されており、かつて在郷町が所在していた地区は、現在もなお商店や住宅が密集した「まち」となっている。

【註】

1 「裏山遺跡」　調査概報　筑後市教育委員会　1966
2 「狐塚遺跡」　筑後市教育委員会　1970
3 「筑後東部地区遺跡群Ⅱ」　筑後市文化財調査報告書　第12集　筑後市教育委員会　1995
4 「筑後東部地区遺跡群Ⅵ」　筑後市文化財調査報告書　第36集　筑後市教育委員会　2001
5 「筑後市史―第1巻―」　筑後市　平成9年



1. 尾島町囲遺跡
2. 上北島塚ノ本遺跡
3. 上北島前田遺跡
4. 裏山遺跡
5. 鶴田木屋ノ角遺跡
6. 鶴田東大坪遺跡
7. 鶴田西田遺跡
8. 鶴田西畑遺跡
9・10. 鶴田牛ヶ池遺跡
11. 鶴田東牛ヶ池遺跡
12. 鶴田牛ヶ池遺跡
13. 鶴田東牛ヶ池遺跡
14・15. 鶴田牛ヶ池遺跡
16. 鶴田西牛ヶ池遺跡
17. 久恵中野遺跡
18. 鶴田武津恵遺跡
19. 鶴田岸添遺跡
20. 上北島裏山遺跡
21. 水田杉ノ元遺跡
22・23. 水田山伏遺跡
24・25. 水田上仁良葉遺跡
26. 久恵権藤遺跡
27. 久恵川ノ上遺跡
28. 久恵権藤遺跡
29. 久恵岸ノ下遺跡
30. 久恵野元遺跡
31. 鶴田楢原遺跡
32. 鶴田大南遺跡
33. 鶴田前畠遺跡
34～36. 鶴田岸添遺跡
37. 常田長田遺跡
38～41. 鶴田中市ノ塚遺跡
42. 尾長下町裏遺跡
43. 志八反田遺跡
44. 志藪の内遺跡
45. 常用ニラバ遺跡
46. 常用柑割遺跡
47. 常用野々下遺跡
48. 志野添遺跡
49・50. 志上婦計遺跡
51. 志下婦計遺跡
52. 常用野中遺跡
53. 志下婦計遺跡
54. 尾島上婦計遺跡
55. 尾島前田遺跡
56. 志前田遺跡
57. 志西田遺跡
58. 志西野々遺跡
59. 志垣添遺跡
60. 津島南佛生遺跡
61. 津島南笹原遺跡
62. 津島西牟田遺跡
63. 津島北石伏遺跡
64. 津島四ヶ町遺跡
65. 新溝松原遺跡
66. 新溝丸田遺跡

Fig.1　周辺遺跡分布図（1/25,000）

Ⅲ.調査成果

(1) はじめに（Fig.2）

当遺跡は、筑後市大字尾島字町囲653-1に所在し、標高12.5m位の低位段丘上にある。発掘調査は宅地分譲に伴い、永久構築物である道路設置予定個所約70m²を実施した。調査期間は平成13年6月18日から同年7月9日までで、この間、重機による表土除去、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影等を行った。調査は小林勇作が担当し、柴田剛、上村英士の協力を得た。調査の結果、溝や土壙等を検出し、以下はその成果について報告する。

(2) 検出遺構

溝

SD1（Fig.3・4、Pla.1）

調査区の東端で検出した南北溝で約3.7m分を確認した。当溝に関連する遺構の先後関係は、古い順にSD4→SD1である。溝の東端部は、調査区との境界に遮られていることで残念ながら溝の幅を確認することはできなかったが、推定上幅は約4m位と思われる。溝の深さにおいても最深部まで掘り下げることができておらず、遺構検出面から1.5m分を掘り下げたに止まった。断面形はほぼU字状を呈するものと思われ、埋没は概ね西部から堆積土が流れ込んだ状況である。堆積土には地山土（黄褐色粘質土）を多く含んだ層があることから、土堤の存在を指摘することができる。出土遺物は土師器（鉢・甕）、陶器（鉢・擂鉢・甕）、染付（皿・椀・瓶）、金属製品（煙管・簪）、石製品（不明）、瓦、ガラス製品（瓶）等が認められた。

SD2（Fig.3・4、Pla.1）

調査区の東側でSD3を切るように検出した南北溝で約4m分を確認した。当溝に関連する遺構の先後関係は、古い順にSD3→SD2である。上幅約0.55m、下幅約0.35mで、深さは遺構検出面から約0.60mを測る。断面形はU字状ないしは逆台形状を呈し、堆積土は明茶灰色土（黄褐色ブロック、灰茶色粒子を多く含む）の単一層であった。出土遺物は陶器（火入）、不明土製品等が認められた。

SD3（Fig.3・4、Pla.1・2）

調査区の東側で確認した南北溝である。当溝に関連する遺構の先後関係は、古い順にSD4→SD3→SD2である。溝底は北部と南部で段差を生じ、遺構検出面からの深さは北部で1.10m、南部で0.70mを測る。埋没状況は概ねレンズ状の堆積を呈しているが、中

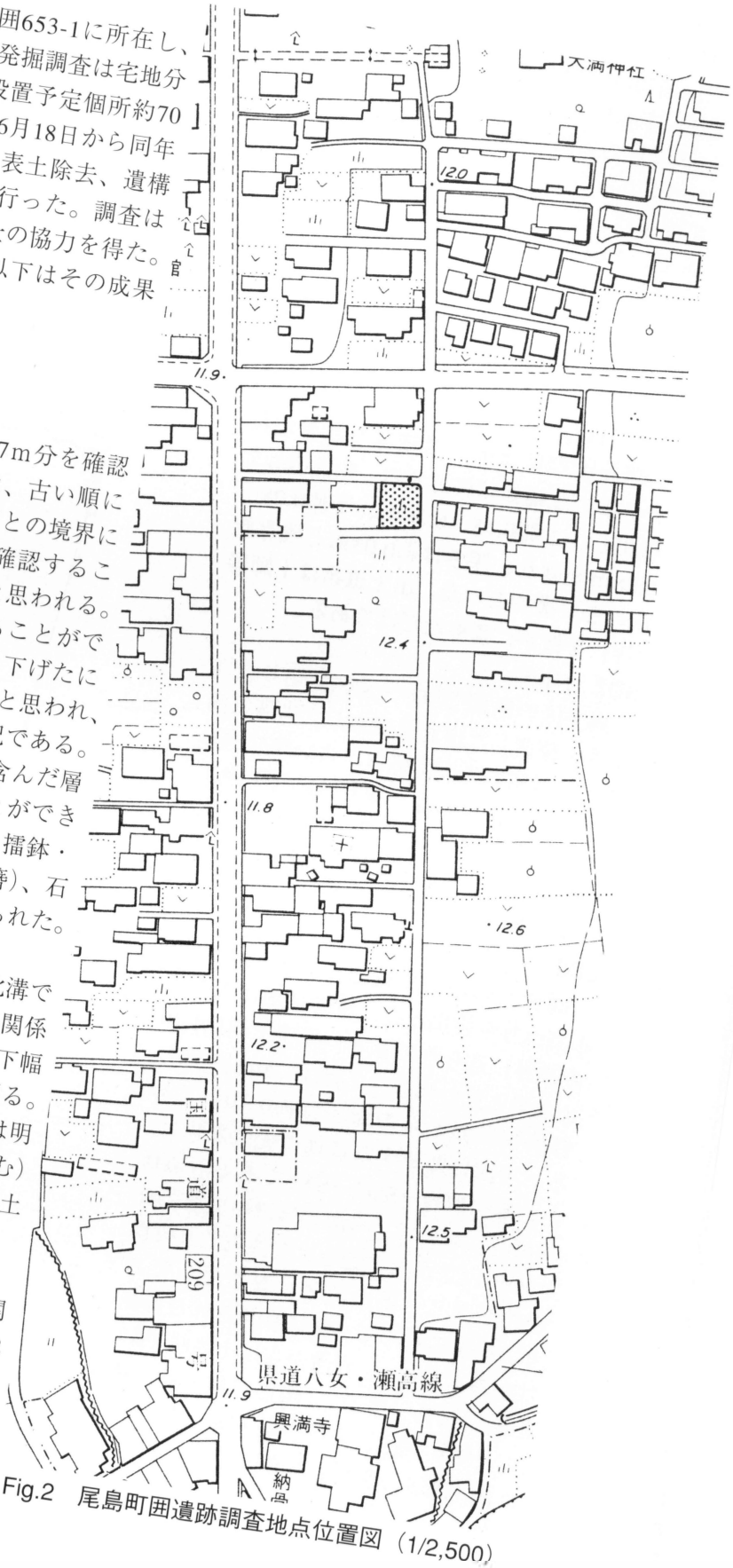


Fig.2 尾島町囲遺跡調査地点位置図（1/2,500）

間層からは硬化土及び2～3面の硬化面が確認された。硬化土は一定の堅さを有し、硬化面においては更に賢固なものであった。遺物は土師器（坏）を認めた。

SD4（Fig.3・4、Pla.1）

調査区の東側で確認した北東―南西方向の溝である。当溝に関連する遺構の先後関係は、古い順にSD4→SD1・SD3である。上幅約0.85m、下幅約0.70m、遺構検出面からの深さは約0.15mを測る。溝底は比較的平坦面を呈し、堆積土は明茶色粘質土の単一層であった。出土遺物は皆無であった。

SD5（Fig.3）

調査区のほぼ中央で確認した南北溝で、溝の北端部は終息する。約3.10mを検出し、上幅0.15～0.36m、下幅0.08～0.28mを測り、深さは約0.03mと残存状況の悪い溝であった。出土遺物は土師器（片）を僅かに認めただけである。

SD7（Fig.3）

調査区の西端でSD9・SX6を切り合うように確認した南北溝である。当溝に関連する遺構の先後関係は、古い順にSD9→SD7→SX6である。約3.35m分を検出し、遺構検出面からの深さは約0.10mと比較的浅いものであった。当溝からは土師器（甕）が出土している。

SD9（Fig.3・4）

調査区の西端で確認した南北溝で約4.05m分を検出した。溝の西部は調査区の境界に遮られており、推定上幅は1.40m前後と思われる。下幅は1.00m前後で、遺構検出面からの深さは約0.70mである。当溝に関連する遺構の先後関係は、古い順にSD9→SD7→SX6である。遺構検出時において、当溝のほぼ中央部で焼土が検出された。焼土は赤茶色土と黄褐色土が混じりあった単一層を呈しており、当溝に対して一気に廃棄された可能性が考えられる。当溝からは土師器（鉢）、磁器（仏具・猪口）、陶器（椀・鉢・擂鉢・火鉢・甕）、染付（皿・椀・瓶）、石製品（挽臼）等が出土遺物として認められた。

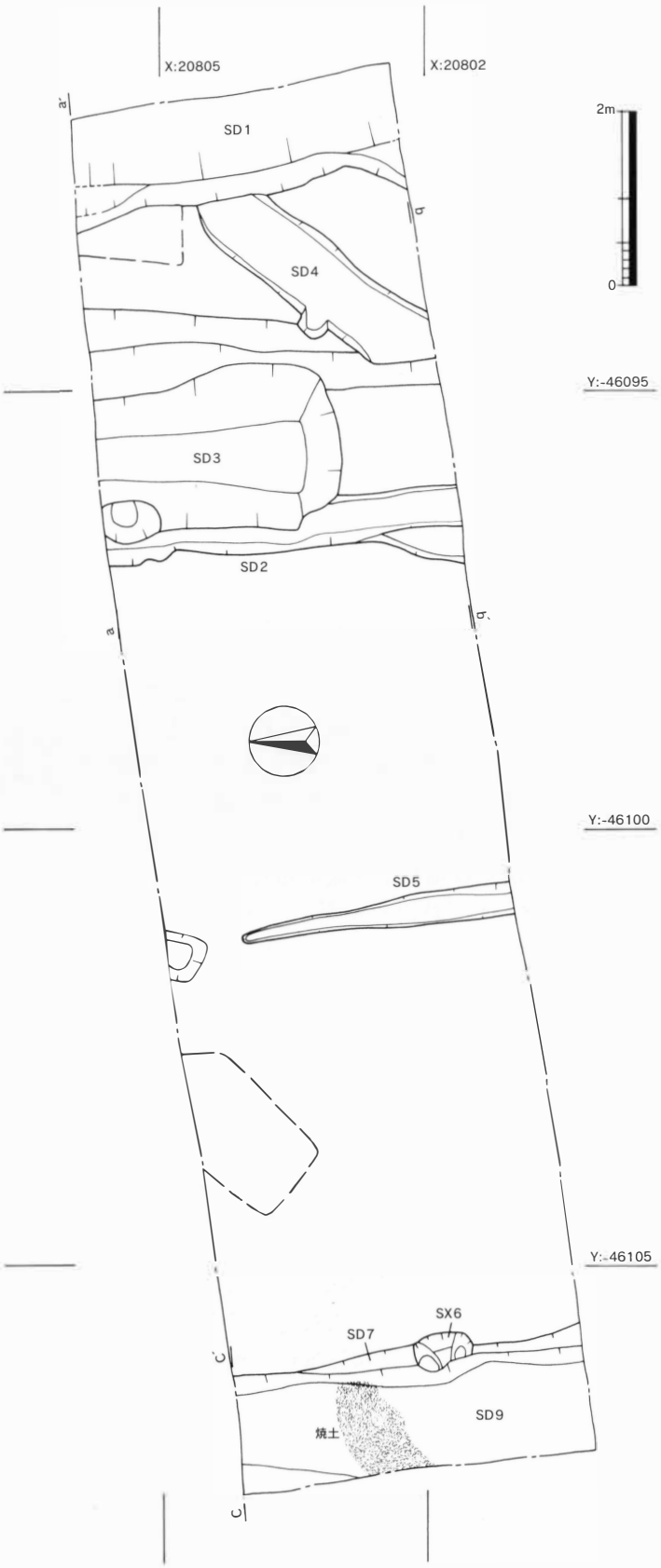
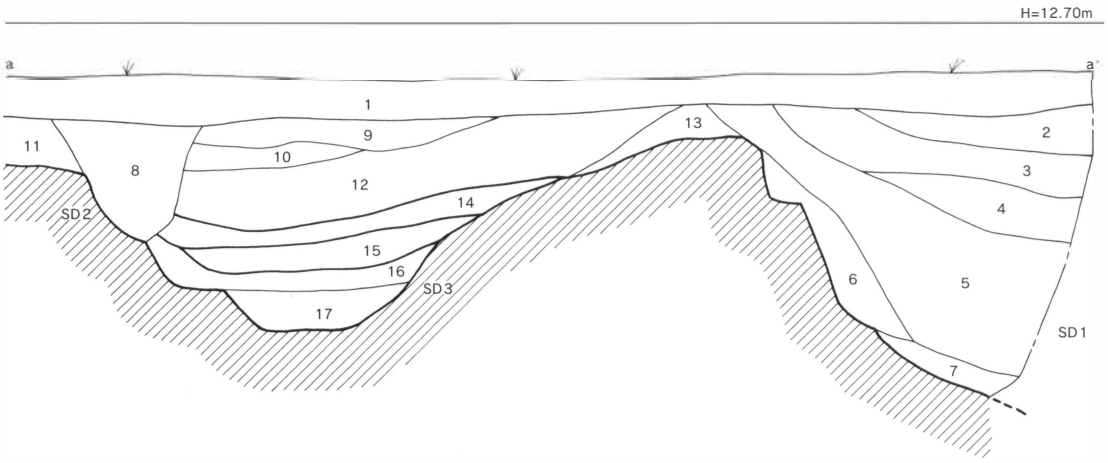
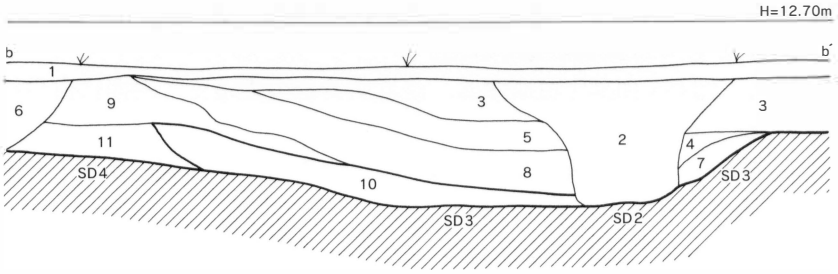


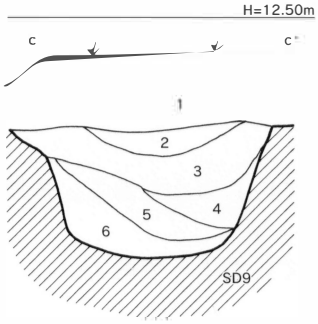
Fig.3　尾島町囲遺跡遺構全体実測図（1/80）



1.灰褐色土（表土）
2.暗灰褐色土
3.暗灰褐色土（黄色粒子多混）
4.明灰褐色土
5.暗灰褐色土
6.暗灰褐色土・黄褐色粘質土混じり
7.濃黒灰色土
8.明茶灰色土（黄褐色ブロック・灰茶色粒子多混）
9.明茶灰色土（黒茶色及び黄茶色ブロック混）
10.暗茶色粘質土（黒茶色ブロック多混）
11.明茶灰色土（黒茶色及び黄茶色粒子多混）
12.黒褐色粘質土（一部に黄褐色ブロックを含む）
13.明茶色粘質土
14.黒灰色粘質土
15.明黒茶色粘質土
16.明黄茶色粘質土
17.暗黒灰色粘質土（黒褐色及び黄褐色粒子多混）



1.バラス（表土）
2.明茶灰色土（黄褐色ブロック・灰茶色粒子多混）
3.明茶灰色土（黒茶色ブロック多混）
4.暗茶色粘質土（黒茶色ブロック少混）
5.暗茶色粘質土（黒茶色ブロック多混）
6.灰茶色土
7.暗茶色粘質土
8.黒褐色粘質土
9.濃茶色粘質土
10.黒灰色粘質土
11.明茶色粘質土



1.灰褐色土（表土）
2.黄灰色粘質土
3.明黒茶色土
4.明黒灰色土
5.暗黒茶色土
6.濃黒茶色土（黄色粒子少混）

Fig.4　SD1～4・9土層断面実測図（1/40）

不明遺構

SX6（Fig.3）

調査区の西端で確認した。当遺構に関連する先後関係は、古い順にSD9→SD7→SX6である。堆積土は比較的パサパサした黒灰色土で、撹乱の可能性が大きい。遺物は土師器（鍋）、瓦質土器（水注）、陶器（擂鉢）等が出土した。

（3）出土遺物

溝

SD1（Fig.5・6、Pla.3・4）

土師器

鉢（1）　底部の細片で、底径20.00cmを復原する。底部内面には粘土貼り付けによる支えを施し、底部外端面には貝殻状に型押しされた脚が3ヶ所に貼り付けされていたと思われる。底部外面下位にはスタンプによる龍文、桜花文を押印する。植木鉢として製作された可能性が考えられる。

さな（2）　円盤状を呈する細片で、外径は15.00cmを復原する。1.60cm前後の小穴を無数に施し、上端部外面は斜めに面取りを行っている。1にフィットすることからセット関係にあるものと思われる。

磁器

鉢（3・4）　3は口縁部から体部にかけての破片である。口径30.00cmを復原し、口縁端部はL字状に折り曲げられている。乳茶色の素地に淡黄緑色の透明釉を内外面に施されているが、口縁部外面の屈曲部及び体部外面下位の一部において露胎となっている。4は底部の破片で、高台径は15.00cmを復原する。見込みには胎土目跡が残り、推定で3ヶ所あったものと思われる。素地及び釉調は3と類似していることから同一個体の可能性が強い。高台部は露胎である。

陶器

蓋（5）　ほぼ完形品で擬宝珠のつまみを有する。つまみ径は1.60cm、口縁径は9.00cm、かえり径は6.20cmを測る。外面の口縁部から天井部にかけては鉄釉が施される。

椀（6）　口径16.80cm、高台径6.00cm、器高5.10cmを復原する。淡乳灰茶色の素地で、内面に白化粧土を施し、ほぼ全面に飴色の透明釉を施釉する。

鉢（7）　口径24.00cmを復原し、口縁端部はL字状を呈する。淡赤紫色の素地で、外面には白土を流しかけし、鉄釉を基調とした釉を口縁部内面から外面にかけて施す。

染付

皿（8～10）　8は底部の細片であるが、細かく打ち掻いた痕跡が残っており、転用品として使用された可能性がある。高台径は5.00cmを測り、外面には呉須にて文様が描かれている。明白色の素地にやや青みがかった透明釉を施すが、畳付部は露胎である。9・10は輪花である。9は細片で精選された淡乳茶色の素地に透明釉を施す。内面には呉須で文様が描かれており、貫入が認められる。10は破片で口径12.60cm、高台径8.20cm、器高3.40cmを測る。精選された乳白色の素地に青みがかった透明釉を全面に施すが、高台内は蛇ノ目状に釉が掻き取られている。内面には5ヶ所のハリ支え痕が認められ、呉須にて山・林等の文様が描かれている。

瓦

平瓦（11）　調整は工具によるケズリと思われ、側端部は面取りを行っているようである。器厚は約1.80cmで、焼成は表面が黒色、芯は白灰色を呈する瓦質である。

丸瓦（12）　調整は工具によるケズリと思われ、側端部は面取りを行っているようである。器厚は約1.70cmで、焼成は表面が黒色、芯は白灰色を呈する瓦質である。

金属製品

簪（13）　材質は銅製と思われる。玉状の先端部から一旦バチ型に広がるが、すぐにすぼまり二股に分かれる。厚みは1mm前後で、両脚部は欠損している。

煙管（14）　煙管の吸口部で、材質は不明である。吸口端部は玉縁状を呈し、内径は2mmを測る。一方、煙管側の差込口には補強帯を持ち、内径は5mmを測る。

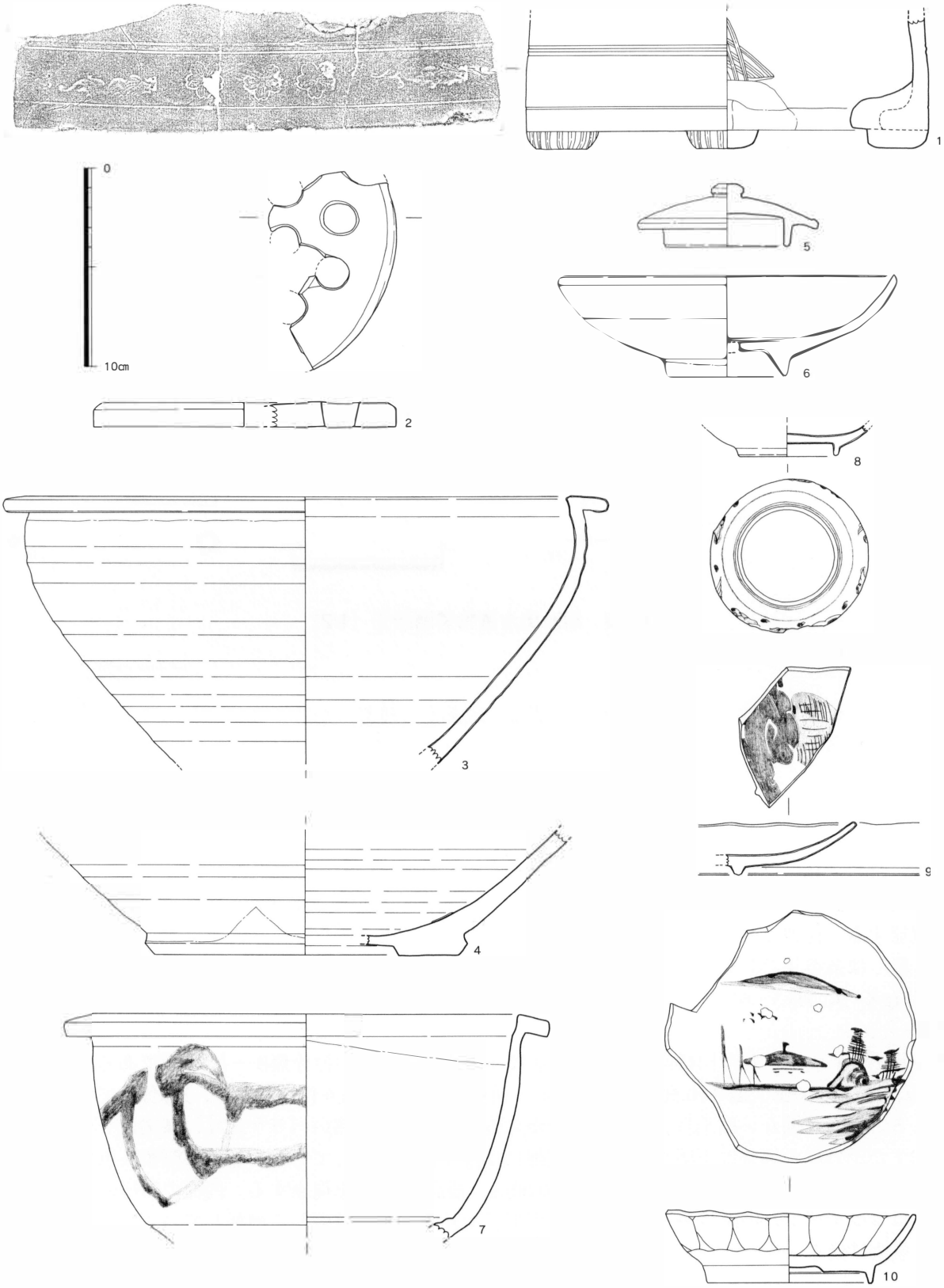


Fig.5　SD1出土遺物実測図①（1/3）

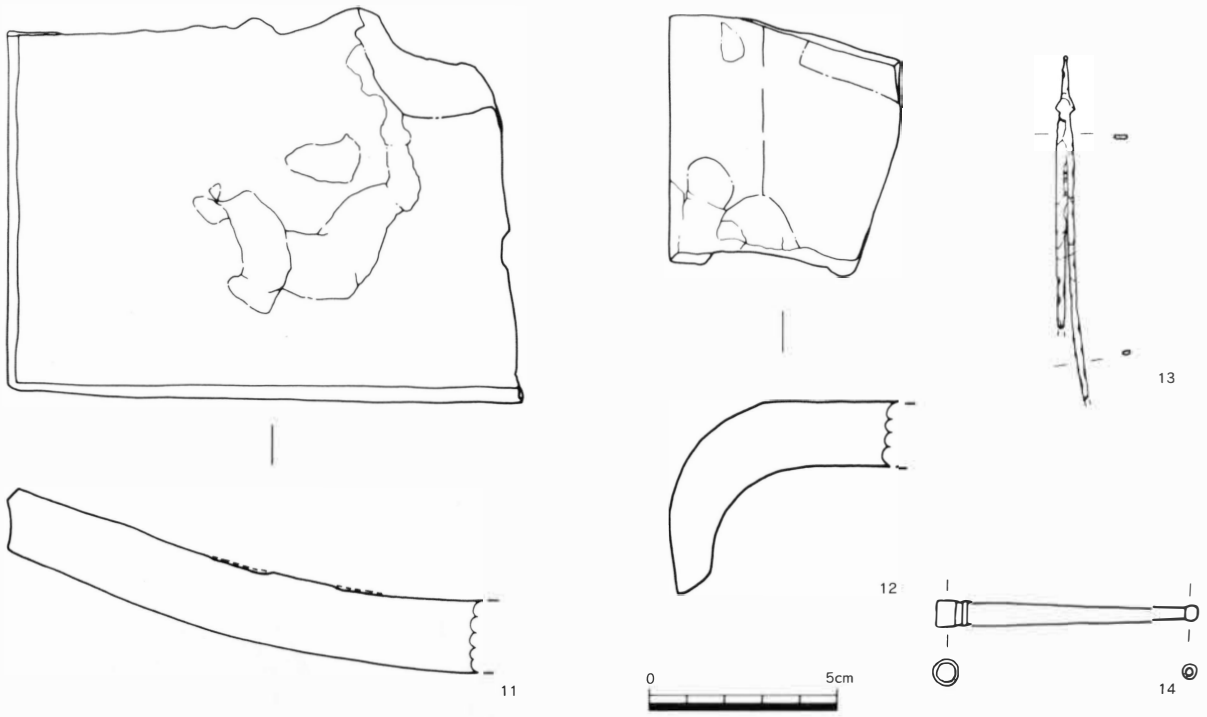


Fig.6　SD1出土遺物実測図②（1/2）

SD2（Fig.7、Pla.4）

陶器

火入（15）　底部の細片で高台径は5.00㎝を測る。底部から体部にかけては一旦屈曲して立ち上がる。やや粗い淡黄灰色の素地に暗緑色の銅釉を体部外面に施し、一部釉ダレを認める。内外面の調整はヘラケズリである。

SD3（Fig.7）

土師器

坏（16・17）　16は口縁部の細片で、色調は淡黄茶色、胎土に微砂粒、赤色粒子を少量含む。内外面の調整はヨコナデである。17は底部の細片で、底径8.00㎝を復原する。色調は淡赤茶色で、胎土に微砂粒、赤色粒子を少量含む。外底の切り離しは糸切りである。

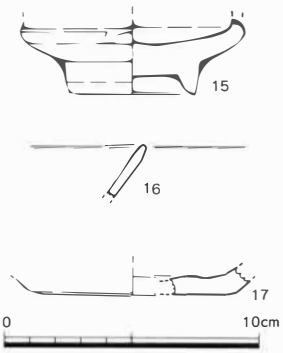


Fig.7　SD2・3
出土土器実測図（1/3）

SD9（Fig.8・9、Pla.5・6）

土師器

火鉢（18・19）　18・19は口縁端部が内側に屈曲するタイプで、山村分類B—Ⅰ・b類である。18は口径33.80㎝、底径26.00㎝、器高10.50㎝を復原する。逆台形状の脚を貼り付けており、3脚付いていたものと思われる。内面は細かい刷毛目、口縁部内面から外面にかけては粗いヘラケズリ、脚部はナデによる調整を施すが、外底の調整は不明である。内底部には薄く煤が付着している。色調は暗黄茶色で、胎土に微砂粒を少量含む。19は口径40.00㎝、底径30.00㎝、器高10.00㎝を復原する。内面の口縁部から体部にかけてはヨコナデで、内底は不定方向の粗い刷毛目を施す。外面は著しく磨耗しているため調整不明である。色調は淡赤茶色で、胎土に微砂粒、細砂粒を多く含む。

青磁

仏花器（20）　高台径6.00㎝を復原する。口縁部と底部はラッパ状に開き、体部は絞まったタイプである。精選された淡乳白色の素地に淡黄緑色の釉を外面に施す。畳付部は露胎で、釉には気泡が目立つ。内面はヨコナデ、外面はヘラケズリ調整である。

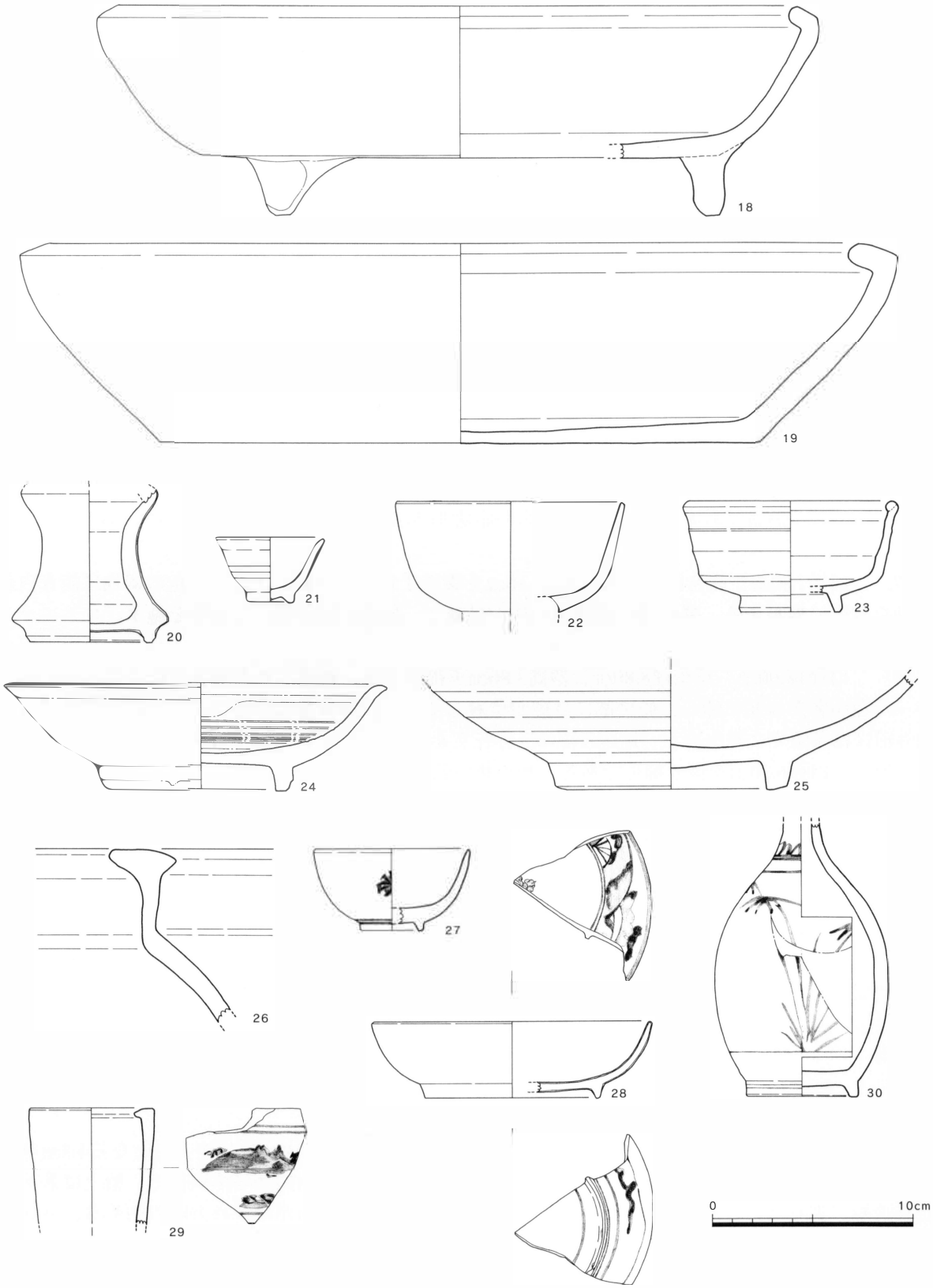


Fig.8　SD9出土土器実測図（1/3）

磁器

猪口（21）　口径5.40㎝、高台径2.40㎝、器高3.20㎝を測る。外面にはヘラによる片切り彫りの線刻が3条施され、精選された淡乳白色の素地に淡青白色の釉を全面に施す。畳付けには砂が付着している。

陶器

椀（22）　口径11.40㎝を復原する。淡灰茶色の素地に黒褐色・赤茶色の釉を斑状に施す。

火入（23）　口径10.80㎝、高台径5.00㎝、器高5.50㎝を測る。底部から体部にかけてはやや屈曲しながら立ち上がり、口縁端部は内側に玉縁状口縁を呈する。淡黄茶色の素地に淡緑茶色の釉を口縁部内面から体部外面にかけて施釉する。内面及び体部外面はヨコナデで、底部外面及び高台部はヘラケズリ調整である。

皿（24）　口径18.60㎝、高台径8.40㎝、器高5.40㎝を復原し、口縁端部はやや外反する。素地は精選された明赤茶色である。釉調は内面において口縁端部に緑白色の銅釉、口縁部及び底部に白化粧土、体部及び見込みは紫褐色の鉄釉を施す。外面においては体部から高台の一部にかけて紫褐色の鉄釉を施す。焼成は不良で、釉調の発色は悪い。

鉢（25）　高台径11.60㎝を測る。やや粗い暗紫茶色の素地に鉄釉を内外面に施釉する。畳付部、高台内は露胎である。調整は内面がヨコナデ、外面はケズリである。

甕（26）　口縁部の細片で、口縁端部はT字状を呈する。口縁部内面及び外面はヨコナデで、体部内面は叩き後刷毛目の調整である。細砂粒を多く含む暗紫褐色の素地に紫褐色の鉄釉を外面に施す。

染付

椀（27）　口径7.80㎝、高台径3.10㎝、器高4.10㎝を復原する。やや粗い淡乳灰白色の素地に淡青白色の透明釉を全面に施釉する。畳付部には僅かに砂が付着し、外面には呉須にて文様を施す。コンニャク印判を使用か?。

皿（28）　口径14.00㎝、高台径8.80㎝、器高3.80㎝を復原する。精選された淡乳白色の素地にやや青みがかった透明釉を全面に施し、畳付部には砂が付着してる。口縁端部は鉄銹による口紅装飾を施し、体部内外面には呉須で文様を描く。見込みには五弁花文を押印、高台内には何らかの銘が施される。

香炉（29）　口径6.20㎝を測る細片である。やや粗い乳灰白色の素地に淡青白色の透明釉を外面に施す。外面にはややくすんだ呉須で山等の文様を描く。

瓶（30）　高台径5.60㎝を測る破片である。やや粗い乳白色の素地にやや青みがかった透明釉を外面に施す。体部下位以下においては著しく風化しており、発色が悪い。一部に貫入を認め、畳付部には砂が付着する。外面にはやや黒澄んだ呉須で草文等を描く。

石製品

挽臼（31）　上臼の破片で、石材は安山岩製と思われる。外径28.00㎝、高さ10.80㎝、軸部径1.60㎝を復原し、擂面は著しく磨耗しているため擂目は不明である。中心軸からやや離れた部分に供給口を貫通させる。供給口径は2.5㎝前後である。

不明遺構

SX6（Fig.9、Pla.6）

瓦質土器

水注（32）　口径9.20㎝、器高9.00㎝、底径10.00㎝を復原する。体部中位には注入口となる4.5㎜径の小穴が穿孔され、その下位にはやや垂れ下がった鍔が貼付けられる。色調は暗黒灰色で、胎土は若干の微砂粒を含む。調整は口縁部内面・底部内面・外面はヨコナデ、体部内面は斜め方向の刷毛目、外底は不明である。

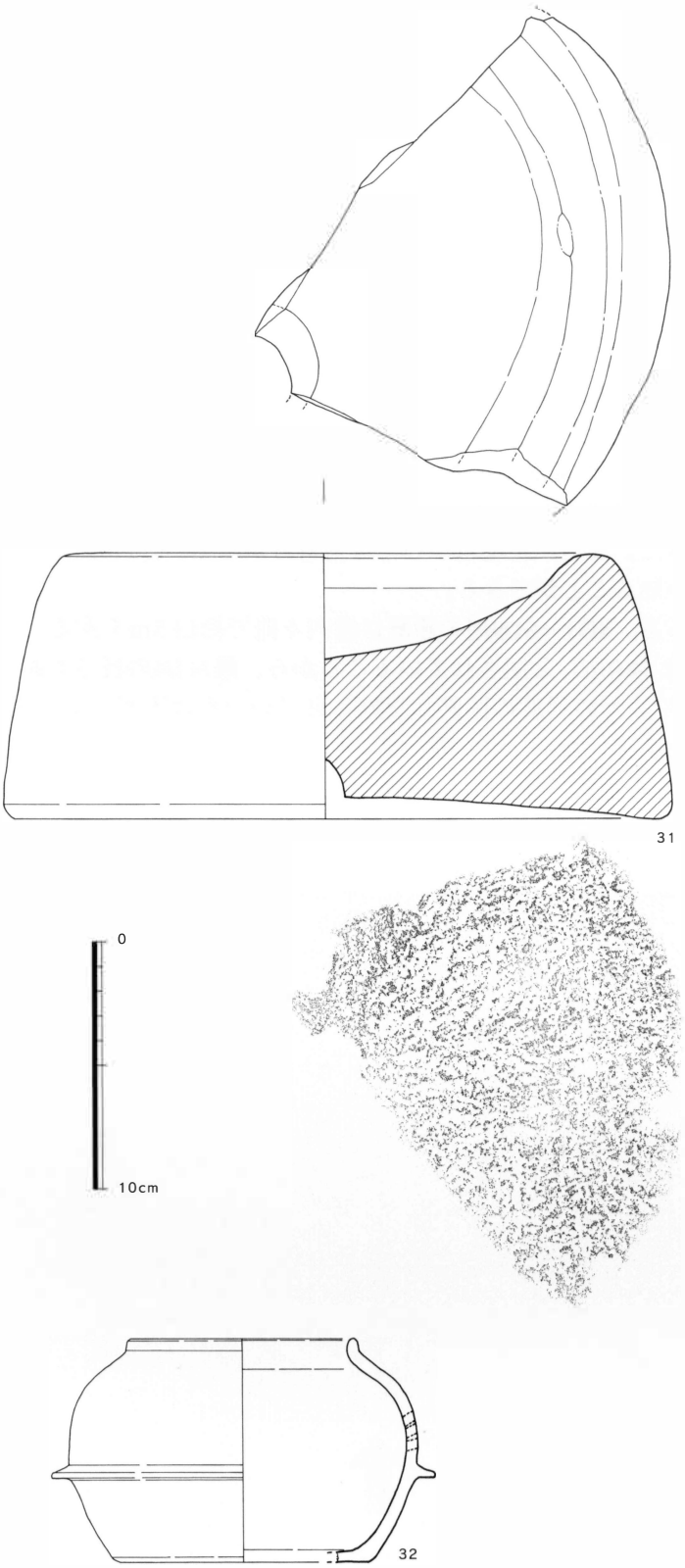


Fig.9　SD9出土石製品・SX6出土土器実測図（1/3）

Ⅳ.まとめ

今回、調査した尾島町囲遺跡が所在する尾島地区は、旧藩政時代に在郷町として栄えた「まち」であった。尾島町が在郷町として成立したのは延宝2年（1674）で、「上妻郡市ノ塚新町出来」（『米府年表』）とあり、開基の経緯については「久留米藩旧家由緒書」「上妻郡新庄組大庄屋矢賀部氏旧記控」等に記されている。これを元に編纂された市史の内容を概略すると、かつての集落は現在の矢部川近くにあったため度重なる洪水に見舞われていたようで、延宝元年5月23日の大洪水を期に翌年（延宝2年）に現在の大字尾島へ新村として設置された。尾島町の規模においては南北320間、町屋敷奥行き30間、町を囲むように外堀を設け、当時120軒程度の家屋が存在した。更に、町の北東隅には産土神を主神とする天満宮、町の南端には浄土真宗興満寺、町の中央には火除け等の避難地が配置されていた。尾島町は当時の街道筋に設けられていたが、他の宿場町に見られる屈曲した道路（枡形や構口等）は備えられておらず、変わりに洪水対策として町囲い東側の南北筋に土堤を築いた独特な町並みであったとされる。

さて、今回報告する尾島町囲遺跡はその一部の調査成果であるが、調査結果からは当時の様相を垣間みることができた。更に中世の遺構も確認されており、ここでは各時代ごとにおける主要な遺構や遺物について概略することでまとめとしたい。なお、前稿を再録した部分があることをお断りしておく。

中世

出土遺物から中世の遺構はSD3が相当する。当溝は調査区内の東側で検出された南北溝である。溝底までの深さは北部と南部で差異が生じ、北部が南部より40㎝程度深くなっている。中世の溝は、当遺跡の東隣に位置する鶴田中市ノ塚遺跡（第2～4次調査）においても同等の溝が確認されていることから、関連性の高い

資料として注目できる。仮に同等の溝と解釈するならば、溝間は約135mを測り、溝の性格としては土地を区割りした溝であったことが想定される。

ところで、溝内からは面的に捉えられる硬化土が確認されている。確認された各々の硬化土は単一層で形成され、上方からの圧力によって均一的に硬化している状況であった。この状況は、市内で検出されている道路状遺構に伴う硬化土に類似するところが大きい（道路状遺構については近年の発掘調査において全国的にみても様々な事例が報告されており、構築された時代や土地、用途によってその規模や構築過程は大きく異なっている）。硬化土及び硬化面は、溝内を往来する事によってできた痕跡であることが考えられる。

以上のことから、SD3は区画溝と道路状遺構の両者の性格を兼ね添えた遺構であることが予想される。要約すると区画された溝内を通行用道路としても使用していたということであるが、あくまで推測の域を脱しておらず、現段階においては両者を断定するには至っていない。

近世

主要な遺構としてはSD1・9が相当し、両溝の埋没は出土した遺物から概ね19C後半以降が比定される。

SD1は調査区内の東端で検出した南北溝である。調査区外へ展開するため溝幅は確定できていないが、推定で約4mと思われる。深さは遺構検出面から1.5m以上を測るためその規模は大きいものであることが予想できる。当遺跡は、当時の尾島町内、北よりの東端に位置していることから、検出されたSD1は町を囲んでいた外堀である可能性が強い。東端の南北方向には洪水対策用の土堤が築かれていたが、このことは土層断面において観察することができた。また、土堤については当遺跡から北へ約170mの場所に現在も一部残されており、当時の様相を窺い知ることができる。

SD9は調査区内の西端で検出した南北溝である。SD1―SD9間の距離は溝内々間で約13.5mを測る。当時の屋敷の奥行きは30間（1間を1.80mとすると54.0m）と記されていることから、概ね1/4の長さであることがわかる。当時の屋敷が屋敷地内において、どの程度の区割りを施されていたかは不明であるが、溝の性格としては区画溝であった可能性が高い。

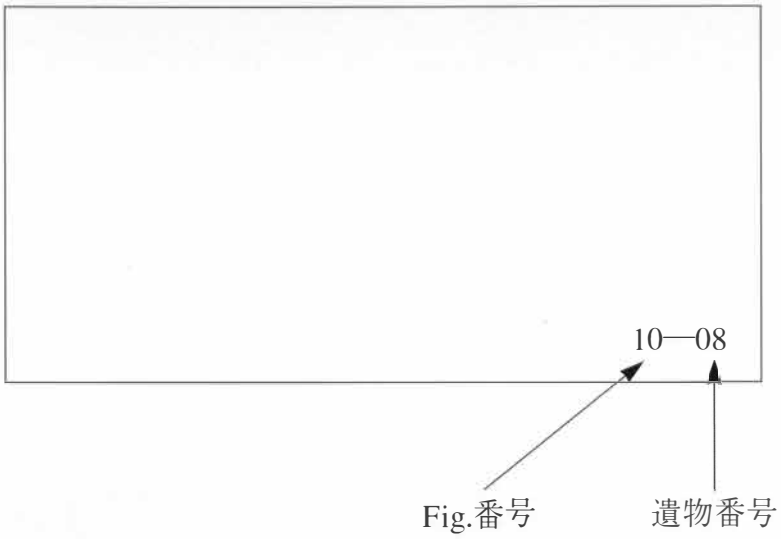
【参考文献】
『筑後市史』第一巻　筑後市　平成9年

土堤残存状況

PLATE

凡　例

遺物の写真右下の番号は、以下のとおりである。



尾島町囲遺跡調査区全景（東から）

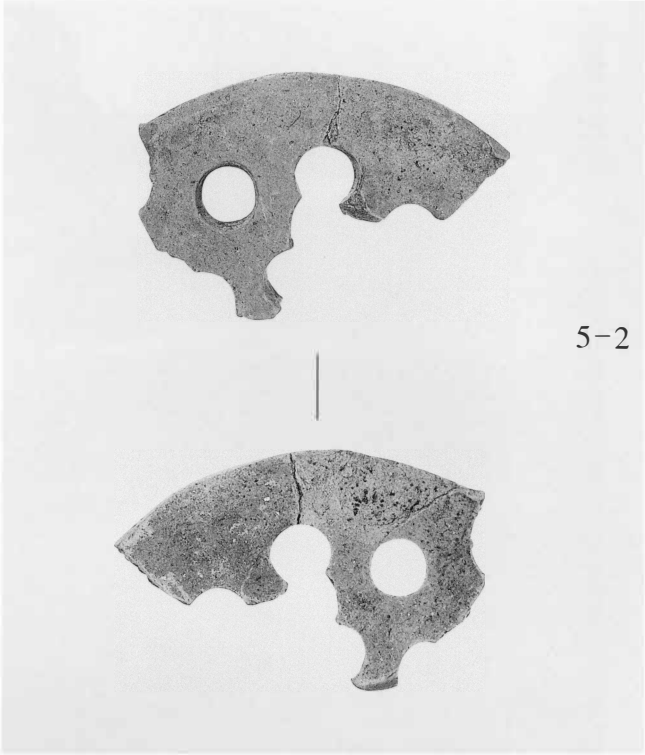
SD1～4完掘状況（北から）

SD3土層断面状況（北から）

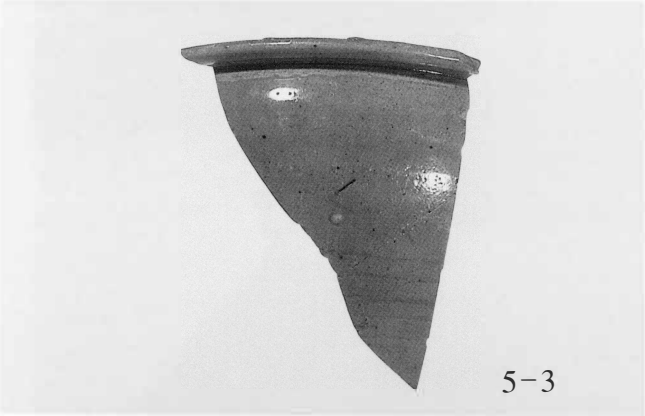
SD3土層断面状況（南から）

Pla.3

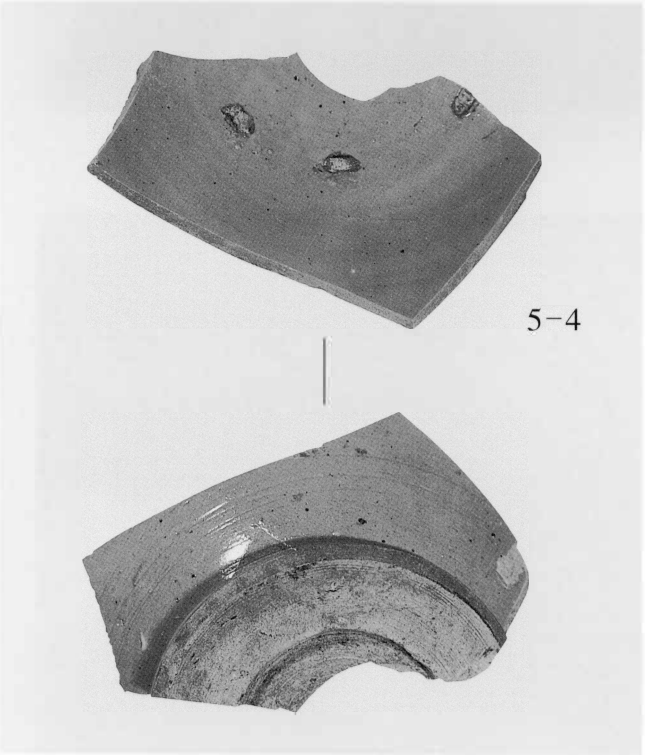
5−1



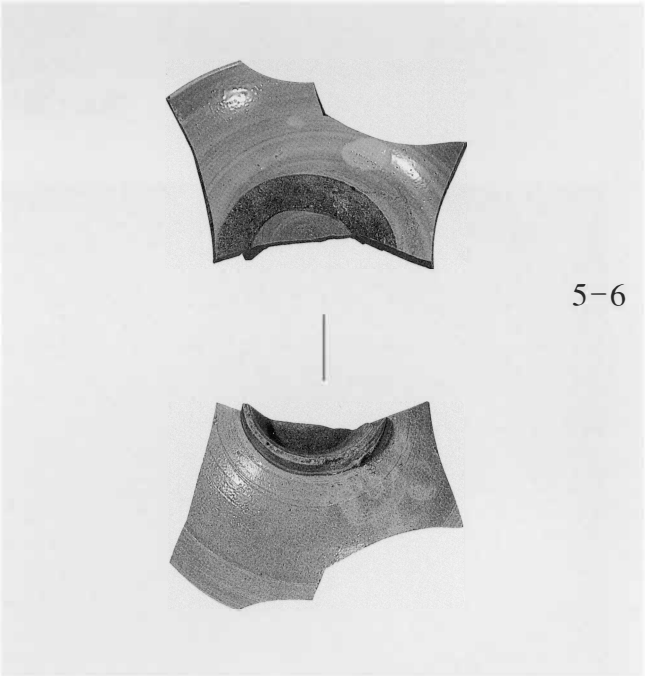
5−2



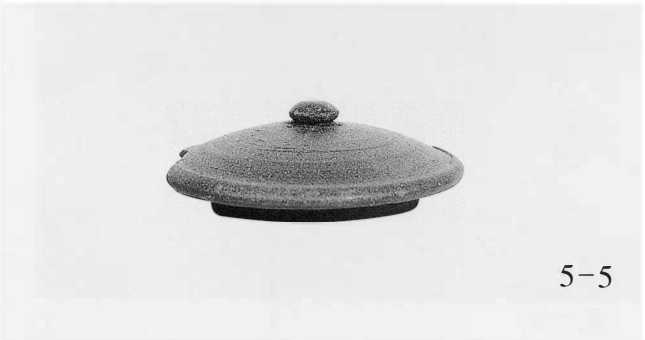
5−3



5−4

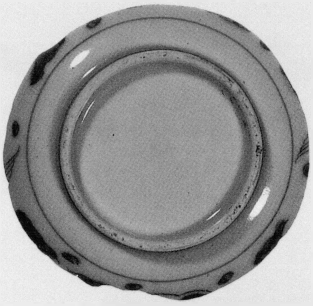


5−6



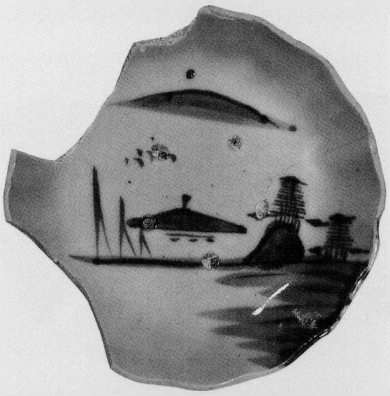
5−5

5−7

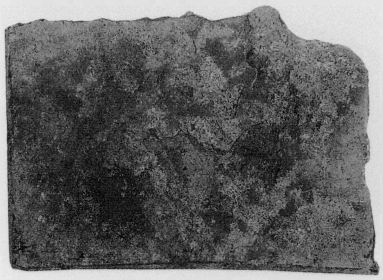


5−8

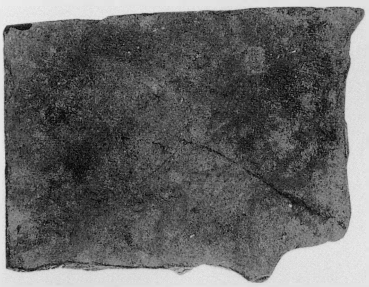
5−9

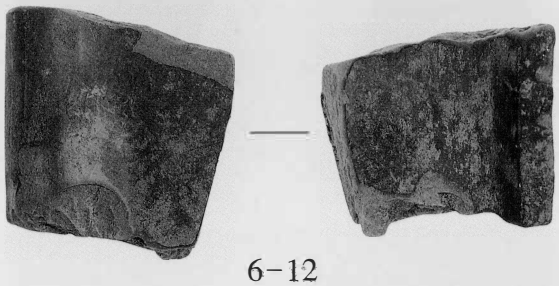


5−10

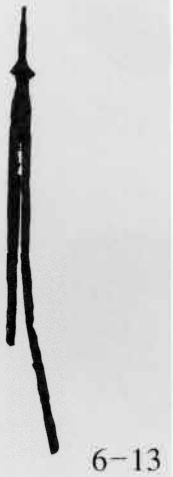


6−11



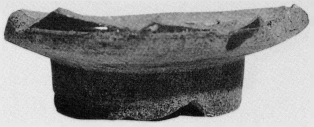


6−12

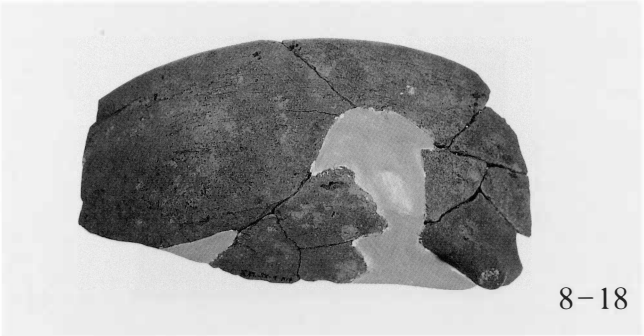


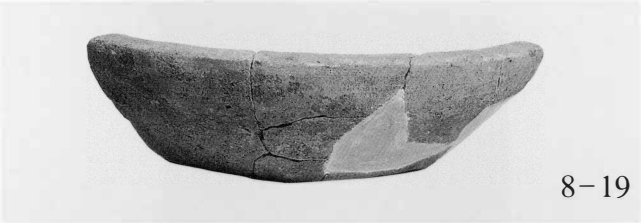
6−13

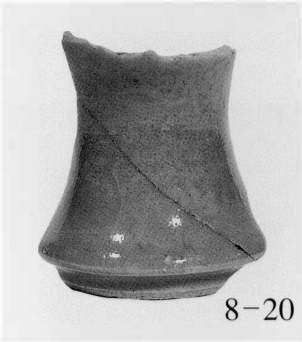
6−14



7−15


8-18


8-19

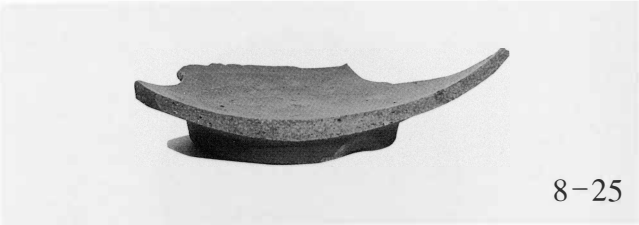

8-20

8-21

8-22

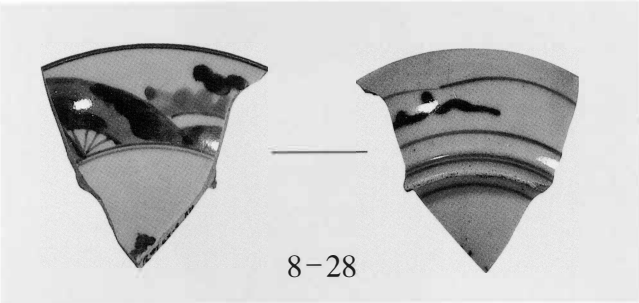
8-23

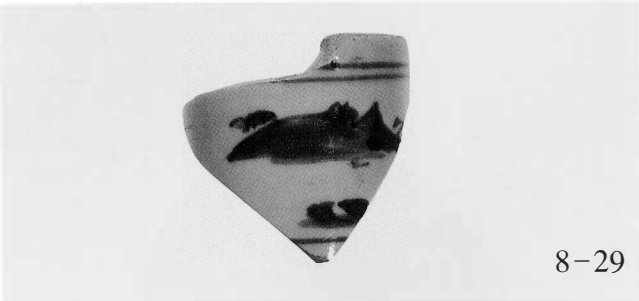
8-24


8-25

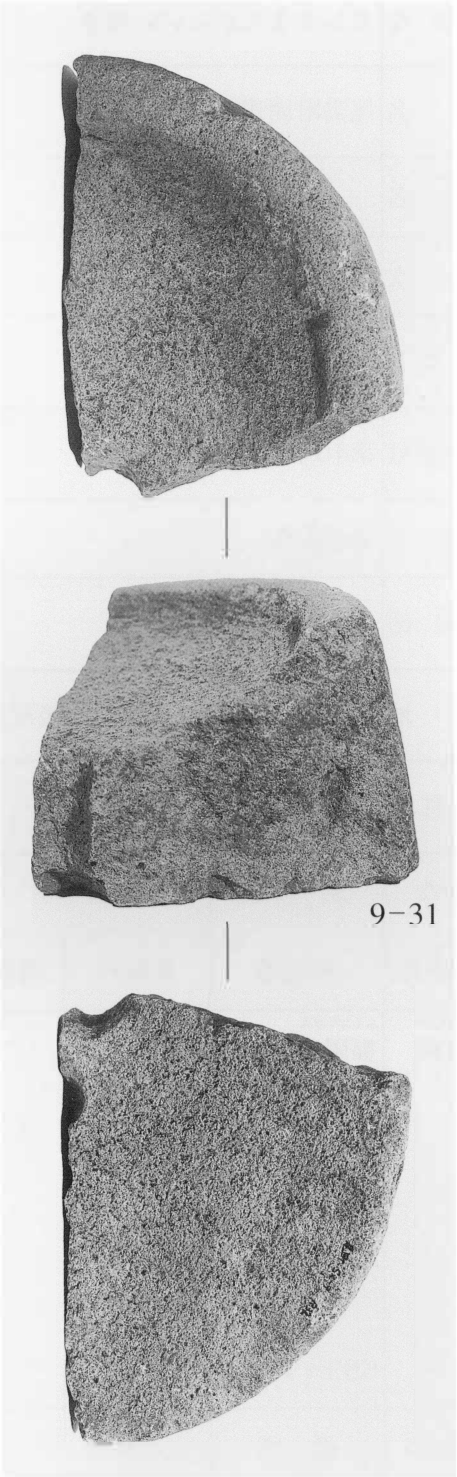
8-26

8-27

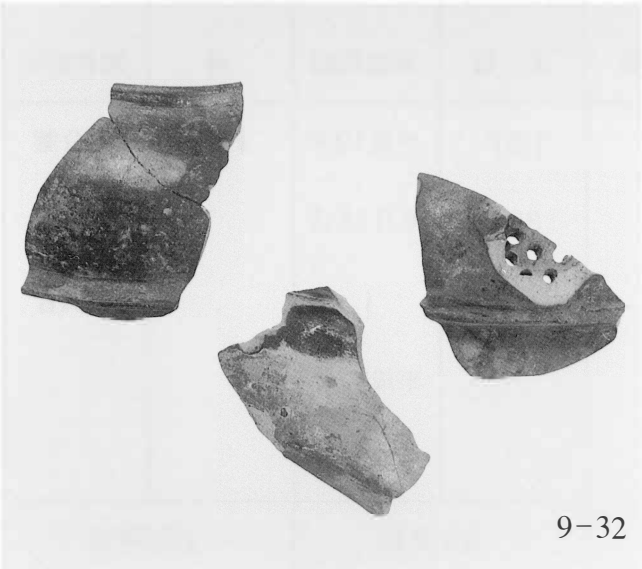

8-28


8-29

8−30



9−31



9−32

尾島町囲遺跡
筑後市文化財調査報告書
第40集
平成14年3月31日
発　行　　筑後市教育委員会
　　福岡県筑後市大字山ノ井898
印　刷　　(資) 四ヶ所印刷
　　福岡県甘木市大字馬田336